

わたしの京都

番外編—カルチエラタン

河野裕子

先日、うちに見えた新聞記者の方は、九州から大阪へ単身赴任中だということで、仕事の合間をぬって奈良や京都を丹念に歩いておられた。こんなチャンスはめつたに無いですからねえ、と言って開いたノートには観光先の予定がびっしり書いてあつてびつくりした。

京都はどこも既知の所ですからね、その目的地に着くだけで、もう嬉しくなつてしまふんですよ、とその新聞記者は話していたが、なるほどそう言われればそのとおりである。

日本人で清水の舞台や五条大橋、三十三間堂を知らない人はいないだろう。本物の清水を知らなくても、「清水の舞台から飛び下りるよう」という慣用句を知らない人はいないはずだ。京都は何でもありの所であり、それ

が長い歴史の重みを持つているために、お寺や小路の名前や京都にゆかりのある人物名などは、無意識のうちに日本人の知識や感性にインプットされているような気がする。だから初めて京都に来た人でも、割と抵抗感なくこの地に入つていけるといふ一面を持つのではないだろうか。同じようなことを考えたのはパリに行つたときのことである。

八年前の三月の半ば頃だつた。わたしの家族はしばらくパリに滞在していたことがある。もともとは永田が大学で講演をするからというので、妻子は付録でついて行つたのであるが、仕事が済むと永田は、あなたたちはしばらく此処にいて楽しんできなさい、と言つて、さっさと自分だけ日本に帰つてしまつた。

ホテルはカルチエラタンにある安ホテルである。朝食だけは出る。おそろしく硬いフランスパンと、飲み物は大きなマグカップに入つたカフェオレだけ。これ以上シンプルな朝ごはんはないが、これがまたとてもおいしかった。本場のフランスパンは、愛想もなにもない塩味だけのパンだつたが、何がどう違うのか、すっかり噛みしめて食べていると、合わせる気分になつてくる。この簡単な朝食を食べて、息子の淳と娘の紅とわたしの三人は、カルチエラタン界隈をよく歩きまわつた。ホテルを出てすこし坂をくだると、シテ島に渡る橋があり、橋を渡ればすぐそこはノートルダム寺院だつた。ある日、夜に寺院に入つたらちようどミサの最中で、賛美歌を歌わ

されたり、お説教を聞かされたり、お布施の袋までまわってきたのには閉口した。賛美歌のときは口だけ動かして誤魔化そうとしていたら、隣の老女が楽譜を見せて指で叩いて、ここだここだと教えてくれる。楽譜も読めないし、音痴なんだから勘弁してほしかった。

カルチェラタン界限はフランスきつての文教地区であり、ソルボンヌ大学をはじめ由緒ある大学が犄めいている。わたしたちが根城にして出歩いているホテルから一筋へだてると、コレージュ・ド・フランスという十六世紀にできた自由な学風の大学があった。大学の前にあった古びた像は誰のものだったのだろう。ポール・ヴァレリーのものだったようだが、気がするが、違っているかもしれない。わ

たしたちは、像よりも、若い学生たちにはかり目が行っていた。黒い長いコートの裾を翻して颯爽とあるく女子学生の姿には溜息が出た。

学生街の一面にある小さなレストランで夕食をとっていたときのことである。後ろのざわめきの中から不意に学生らしい若い声の日本語が聞こえてきた。「あいつら、日本人とちやうのとちやうか?」。思わず三人で顔を見合わせてしまった。なんでパリに来てまで関西弁を聞かんならんのか、と息子が言う。日本人とちがうんやったら私ら何人に見えるんやろう、と娘が言う。あんまりびっくりしたのと、バツがわるかったのどうとう振り向いて彼らの顔は見ないでしまった。今でも

時々あのときのことを思い出すのだが、わたしたち三人はどんなふうに見えていたのだろう。上等のものを身につけていなかったことだけは確かである。

そういえば、ホテルを出ていつもの坂をシテ島方面に歩いてきた時のことである。向こうからやってきた人が、わたしたちの顔を見ていきなり道を尋ねたのには驚いた。わたしたちは、カルチェラタンにすっかりなついてしまっていたし、普段着のような格好をしてきたからであろう。

わたしと紅を置いて息子がデートに行ってしまったこともある。たまたま日本から来ていた恋人に会いにオペラ座にでかけて行ったのである。パリでデートするなんてわたしの世代では考えられなかったことを、彼らは日常感覚でやってしまう。ホテルで住み暮らしている間に日本にいる永田から電話が入り、紅が大学の後期の試験に落ちたことが分かった。さすがに紅は泣いたけれども、翌日からわたしたちは昨日と同じように、地下鉄の回数券を使ってパリの目ぼしい所を歩きまわっていた。フランスパンとカフェオレしか出ないホテルに居たのは一週間ほどのことであつた。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)